

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：若手研究 B
研究期間：2006～2008
課題番号： 1 8 7 3 0 5 2 9
研究課題名（和文） 学校と地域の関係性の変容：インドネシアバリ州美術高校の誕生と死を描く学校誌
研究課題名（英文） Changes in the Interactions between the School and the Communities : Seen in the descriptions of birth and death in the schoolgraphy of art highschool in Bali
研究代表者
田尻敦子 (TAJIRI ATSUKO)
大東文化大学・文学部・講師
研究者番号：00327991

研究成果の概要：インドネシアバリ州の美術高校の誕生と死を描く学校誌を人文科学研究所から出版し、学校と地域における学習のあり方を考察した。バリ州の美術高校に関わる五世代の人々が、世代間、地域間、共同体間で学習の連鎖を繰り返す過程で、「芸術村ウブドゥ」「芸術の島バリ」の芸術文化が創造される過程を描き出した。地域が学校を生み、学校が地域を生み出す相互生成の過程が明らかになった。

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	360,000	4,060,000

研究分野： 教育学

科研費の分科・細目： 教育社会学 教育人類学

キーワード：学校と地域 インドネシア 美術教育 状況的学習論

共同体の変容 バリ 芸術 創造 二重システム 職業高校

1. 研究開始当初の背景

インドネシアには、学校と地域の間を活性化させる二重システム（システム・ガンダ）が存在する。1万3000以上の島々に250以上の言語と文化の存在するインドネシアでは、学校と地域、国家と民族、産業と教育などの多重性のもとで、どのように学ぶのかという課題が存在する。

アジア通貨危機、スハルト政権崩壊以降、地域のあり方は大きく変容した。学校もまた、地方分権化の波の中で統廃合が続いている。

職業高校(SMK)は、4年制から3年制になり、地方の裁量に応じたカリキュラムが自由化された。

従来は、美術高校、工芸高校、音楽舞踊高校などは、4年制で専門性の高い生徒を輩出してきた。しかし、カリキュラム改変において、納期までに同じ製品を作る産業的態度を身につけた労働者を養成する場として再定義されることになった。学校と地域の二重システムは、産業と教育の二重システムの側面が強調されるようになった。現在は、観光高校やIT高校などが乱立し、普通高校も職業

高校も、生徒数の激しい増減が生じている。芸術村として世界的名声を誇るウブドゥ村の美術高校は、その波の中で廃校の瀬戸際にあった（研究終了年度に廃校となった）。国立美術高校スカワティ校は健在であり、アニメーション学科などを新設している。私立と国立の美術高校は、統廃合を繰り返す過程で、美術界を支える多くの人々の学びの場となってきた。美術高校の誕生から衰退までの過程を数世代に渡りインタビューをすることで、学校と地域の関係性がどのように変化してきたかを探る。

2. 研究の目的

バリ州の美術高校を事例として学校と地域の関係性の変容を明らかにすることが本研究の目的である。

美術高校が地域との関係性のもとで、どのように誕生し、繁栄し、衰退しているのかを明らかにする。第一に、バリ州美術高校の誕生から死に至る過程を学校誌（スクールグラフィ）として描く。多重的な地域との関係性を歴史的に明らかにする。第二に、新たにバリ州で誕生しているコンピュータの職業高校、観光高校、ビジネス高校と地域の関係性を明らかにする。第三に、ジャワ島やカリマンタンで職業高校の調査をし、地域間の比較を行う。歴史軸、地域間、共同体間の三つの軸の交錯する場でどのような学習が生じているか描きだすことを試みる。

3. 研究の方法

インドネシアの美術高校と地域の実践共同体は激しく変容しており、資料を収集するには現地でのフィールドワークが必須である。

本研究では、参与観察の手法の中でも、参加の度合いをより深めた教育学的なアクション・リサーチの手法を用いる。

美術高校の在校生、卒業生、教員ら数十人の人々と「共に問いを探求する実践共同体」を生成させる手法を新たに編み出した。調査者と被調査者、日本とインドネシア、植民地旧宗主国と植民地という立脚点の違いを認識した上で、異なる立場から共に問いを探求する実践を行った。

その過程で、美術高校の教員達を中心に、歴代の校長や、美術高校の卒業生で芸術大学 ISI の教授になった人々を招へいし、美術高校の過去・現在・未来を考えるシンポジウムも開かれた。

研究協力者のイ・クトゥット・ブディアナ (I Ketut Budiana) 氏は、芸術大学 ISI デン

パサール校客員講師、大東文化大学人文科学研究所の兼任研究員であり、共に研究を行った。ブディアナ氏は、国際的画家であり、土着の芸術家サンギンとして、寺院の彫刻や棺や塔の装飾をし、複数の芸術家協会の会長として、長年、多くの美術展を開催してきた。私立美術高校ウブドゥ校の第一期生であり、卒業後、美術高校の教員として長年勤め、多くの芸術家達を育ててきた。ブディアナ氏は、学校、寺院、美術館など複数の実践共同体間を紡ぎ、世代間の学習をつなぐ結節点の役割を果たしている。

筆者の研究成果は、異なる立場の人々が共に問いを探求する実践をする過程で記述された。そのエスノグラフィのあり方を「種としてのエスノグラフィ」として論じた。「共に問いを探求する実践共同体を生成させる研究手法」と「種としてのエスノグラフィ」を書くという研究方法の考案も本研究の成果の一つである。

4. 研究成果

研究成果として、第一に、学校の誕生から死に至る過程を描くエスノグラフィを人文科学研究所から出版した。美術高校に参加する五世代の人々の学習の連鎖の過程が明らかになった。

第二に、学校と地域の実践共同体間の相互作用を描く著作を出版した。バリ州美術高校の生徒達が、地域の美術館やギャラリーや寺院や祝祭や市場や観光客達との相互作用のもとでいかに学んだのかが明らかになった。

この二つの論文により、学校の誕生から死までの歴史軸、学校と地域の実践共同体の相互作用の同時代軸、地域間の関係性の三つの軸を描いた。

バリ州の美術高校は、地域との相互作用のもとで、芸術家、職人、芸術大学教員、小中高校の美術教師、文化庁やアートセンターの役人、ギャラリーなどのバリ美術界を支える人材を輩出してきた。五世代の学習の連鎖を描いたエスノグラフィは、主に次の三つの観点から構成されている。

第一に、文化人類学や美術史の観点からバリの芸術文化の創造がいかにして論じられてきたかを考察した。観光人類学などでは、「芸術の島バリ」「芸術村ウブドゥ」は、欧米人芸術家や研究者との相互作用のもとで「創られた」とされる。しかし、その記述は「創られた」という受身系であり、「創った」バリの人々の主語が欠けている。そこで、本研究では、学ぶ場を創り、作品を創り続けた人々が、国家や外国人との相互作用のもとで、

いかにして芸術文化を創造したのかを考察した。学び、伝え、作る実践をする個人の名前を主語として記述した。

第二に、オランダ、日本、インドネシアという三つの国家による教育を受けた世代がいかにして美術高校を設立したかという歴史的過程を明らかにした。五世代に渡る人々が、オランダ植民地支配時代、インドネシア独立、大量観光時代、アジア通貨危機以降の動乱を経て、どのように学校と地域における学習を続けてきたかを数十名に対するインタビュー調査をもとに明らかにした。

第三に、五世代の結節点にいる美術高校教員のイ・クトゥット・ブディアナ氏に焦点をあてて、いかにして世代間、実践共同体間での学習が生じているかを論じた。複数の共同体に参加する個人が、実践を行う過程で、世代間と共同体間の網の目が編まれ、学習が生じることが明らかになった。

本研究は、歴史軸、同時代軸、地域間の三つの軸の交差点で、どのように個人が学んだかを論じた。第一に、歴史軸として、五世代の人々の学習の連鎖を論じた。第二に、同時代軸として、個人が、学校、美術館、市場、役所、民宿、寺院、ギャラリーなど多様な実践共同体に参加する過程で、隙間に新たな共同体が生成し、絵画のスタイルに変容が生じたことを明らかにした。第三に、学校と地域間の多重な関係性の網の目を明らかにするために、バリ島、ジャワ島、スイスのバーセル市、植民地旧宗主国のオランダ、日本の福岡アジア美術館などでのフィールドワークの成果を考察した。美術高校の卒業生や教員達が、バリ島だけでなく、ジャワ島の芸術大学ジョクジャカルタ校 (ISI) や、バンドゥン工科大学 (ITB)、オランダやスイスの美術館、日本の美術館などとの関係性のもとで学ぶ過程を論じた。

地域が学校を生み、学校が地域の実践共同体を生み、芸術村ウブドゥ、芸術の島バリという地域アイデンティティが活性化され、実践が行われる過程を学習の観点から明らかにした。

また、一般の人々と共に、バリ島における芸術文化の創造について考えるために、展覧会の企画を行った。日本インドネシア友好50周年を記念して、世田谷美術館で「バリ島絵画の巨匠イ・クトゥット・ブディアナ展 The Great Master of Balinese painting | Ketut Budiana」を開催した。丸木美術館では「自らをみつめる～バリ島絵画の巨匠イ・クトゥット・ブディアナ展 Behold Yourself : The Great Master of Balinese Painting |

Ketut Budiana」が開かれた。ここで展示された代表作のひとつ「母なる大地の力 (Kekuatan Ibu)」は、福岡アジア美術館に収蔵された。記録的な鑑賞者数に加え、北海道や九州や鳥取など各地から研究者が集まり、交流を行うことができた。ワークショップを行い、一般市民にも研究成果を広く伝えることができた。この展覧会での対話をもとに考察を深め、論文を執筆した。

これらの研究成果が出版された頃、私立美術高校ウブドゥ校 (SMSR/SMK, Ubud) は廃校となった。廃校となっても、美術高校と地域のあり方をバリの人々と共に模索し、記述することで、学ぶ場が存続することを意図している。

今後の課題としては、学校がなくなっても、地域でどのように学ぶ場が営まれるのかという点が第一の課題である。第二の課題は、職業高校を普通高校に対して7割に増やす国家の政策がどのような結果をもたらすのかという点を調査することである。この点について、職業高校増設の問題点を論じた論文を上梓した。第三の課題は、個人が複数の矛盾しあう共同体に参加した時、どのような変容が個人と共同体に生じるのかをより明らかにする事である。この点について、「権力の網の目に埋め込まれた個人がいかにして学ぶのか？」という問いのもとで考察を行った。第四の課題は、学校と地域の相互生成の過程を、より理論的に捉え直すことである。

これらの問題意識を踏まえ、フィールドワークを行い、新たな資料を収集し、より深い考察を行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

田尻敦子、「種としてのエスノグラフィ～バリ島の美術学校で学んだ個人のライフヒストリーと学校誌～」、『関係性の教育学』、関係性の教育学会第5巻1号、2006年、同一論文の英文 pp71-79, 日本語文 pp150-158 査読あり

田尻敦子、共に学び実践する人々の共同体～権力の網の目に埋め込まれた個人がいかにして学ぶのか?』、『コミュニティにおける学習』、大東文化大学 人文科学研究所、p31-39 査読無

田尻敦子、「インドネシアにおける職業高校のカリキュラム改変と統合～職業高校の急激な増加の問題点～」、『コミュニテ

ィにおける学習』、大東文化大学 人文科学研究
所、p40-64 査読無

田尻敦子、「バリ島の絵画作品を通して自ら
をみつめる」、『コミュニティにおける学
習』、大東文化大学 人文科学研究所、
p116-122、査読無

〔学会発表〕(計2件)

田尻敦子、「学習する身体～葛藤の埋め込
まれた女性の身体～」、第5回関係性の教
育学会、2007年6月3日、大東文化会館

田尻敦子、「バリ美術界を育んだ女性の葛
藤～バリ島の美術高校創業者イブ・カジ
ェン女史のライフヒストリー～」、第6回
関係性の教育学会、2008年7月10日、大
東文化会館

〔図書〕(計4件)

田尻敦子、『バリ島の美術高校と工房の相
互作用～学校と縁側の学習の場を紡ぐ
二重システムのカリキュラム実践～』、大
東文化大学人文科学研究所、2008年、
pp1-292

田尻敦子、『バリ島の美術高校をめぐる五
世代の学習の連鎖～芸術家イ・クトウツ
ト・ブディアナ氏の複数の共同体へ参加す
る文化的実践』、大東文化大学人文科学研
究所、2007年、pp1-182

田尻敦子、「11章 誰が何のために学校を
作るのか?～フォーマル/ノンフォーマ
ル教育」、『エチオピアを知るための50章』
明石書房、2007年、pp86-91

田尻敦子、「12章 複数の共同体で学ぶ葛
藤～多文化社会のなかで～」、『エチオピ
アを知るための50章』、明石書房、2007
年、pp92-97

6. 研究組織

(1)研究代表者

田尻敦子(TAJIRI ATSUKO)
大東文化大学・文学部・講師
研究者番号：00327991

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：